

日蓮大聖人御書全集

しょうにんごなんじ

聖人御難事

新版
1618
ゝ
1621

しようにんごなんじ

聖人御難事

こうあん ねん がつ にち さい もんかいちどう

弘安2年('79) 10月1日 58歳 門下一同

い けんちようごねんたいさいみずのとうししがつにじゅうはちにち あわのくに

去ぬる 建長五年太歳癸丑 四月二十八日に、安房国

ながさのこおり うち とうじようのこう いま こおり てんしやうだいじん み 廚

長狭郡の内、東条郷、今は郡なり。天照太神の御くりや、

うだいしようけ た はじ たま もほんだいに いま にほん

右大将家の立て始め給いし日本第二のみくりや、今は日本

だいいち こおり うち せいちようじ もう てら しよぶつぼう じぶつどう

第一なり。この郡の内、清澄寺と申す寺の諸仏坊の持仏堂の

なんめん うまのとき ほうもんもう いま にじゅうしちねん

南面にして、午時にこの法門申しはじめて、今に二十七年、

こうあん にねんたいさいいつちのとう ほとけ しじゅうよねん てんだいだいし

弘安二年太歳己卯なり。仏は四十余年、天台大師は

さんじゅうよねん だんぎようだいし にじゅうよねん しゆつせ ほんかい と たも

三十余年、伝教大師は二十余年に出世の本懷を遂げ給う。そ

なか だいなんもう

さきざき もう

よ

の中の大難申すばかりなし。先々に申すがごとし。余は

にじゅうしちねん

あいだ

だいなん

おのおの

知

二十七年なり。その間の大難は、各々かつしろしめせり。

ほけきよう い

きよう

によらい

げん

いま

法華経に云わく「しかもこの経は、如来の現に在すすら

おんしつおお

めつど

のち

うんぬん

しゃかによらい

なお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」云々。釈迦如来の

だいなん

数

知

うち

うま

むぎ

くじゆうにち

こゆび

大難はかずをしらず。その中、馬の麦をもつて九十日、小指

すいぶつしんけつ

たいせき

いただき

ぜんしようびくとう

はちにん

の出仏身血、大石の頂にかかりし、善星比丘等の八人が

み

ほとけ

みでし

こころ

げどう

伴

ちゆうやじゆうにとき

ほとけ

身は仏の御弟子、心は外道にともないて昼夜十二時に仏

ひま

狙

むりよう

しゃくし

はるりおう

ころ

むりよう

の短をねらいし、無量の釈子の波琉璃王に殺されし、無量の

でしとう

酔

ぞう

踏

あじやせおう

だいなん

とう

弟子等がえい象にふまれし、阿闍世王の大難をなせし等、

によらいげんざい

しょうなん

きようめつどご

だいなん

これらは「如来現在」の小難なり。「況滅度後」の大難は、

りゆうじゆ

てんじん

てんだい

でんぎよう

あ

たま

ほけきよう

ぎようじや

竜樹・天親・天台・伝教いまだ値い給わず。法華經の行者

ぎようじや

ならずといわば、いかでか行者にておわせざるべき。また

ぎようじや

ほとけ

み

ち

零

行者といわんとすれば、仏のごとく身より血をあやされ

ほとけ

す

だいなん

きようもん 虚

ず。いかにいわんや、仏に過ぎたる大難なし。經文むな

ぶつせつ

だいこもう

しきがごとし。仏説すでに大虚妄となりぬ。

にちれん

にじゅうしちねん

あいだ

こうちようがんねんかのととりごがつ

しかるに、日蓮、二十七年が間、弘長元年辛酉五月

じゆうににち

いずのくに

るざい

ぶんえいがんねんきのえねじゆういちがつじゆういちにち

十二日には伊豆国へ流罪、文永元年甲子十一月十一日、

こうべ

傷

被

ひだり

て

う

折

どうぶんえいはちねん

頭にきずをかぼり、左の手を打ちおらる。同文永八年

かのとひつじくがつじゅうににち さどのくに はいる くび ぎ のぞ

辛未九月十二日、佐渡国へ配流、また頭の座に望む。そ

ほか でし ころ き お い 過 料 とう

の外に弟子を殺され、切られ、追い出だされ、かりよう等

数 知 ほとけ だいなん およ すぐ し

かずをしらず。仏の大難には及ぶか勝れたるか、それは知ら

ず。

りゆうじゅ てんじん てんだい でんぎよう よ かた なら にちれんまつぼう

竜樹・天親・天台・伝教は余に肩を並べがたし。日蓮末法

い ほとけ だいもうご ひと たほう じつぼう しよぶつ だいこもう

に出でずば、仏は大妄語の人、多宝・十方の諸仏は大虚妄の

しようみよう ほとけ めつごにせんにひやくさんじゅうよねん あいだ いちえんぶだい

証明なり。仏の滅後二千二百三十余年が間、一閻浮提の

うち ほとけ みこと たす ひと にちれんひとり

内に仏の御言を助けたる人、ただ日蓮一人なり。

か こ げんざい まつぼう ほけきよう ぎようじや きようせん おうしん ばんみん

過去・現在の末法の法華經の行者を輕賤する王臣・万民、

はじめは事なきようにて、終ほろびざるは候わず。

はじ
こと
にちれん

つじ
滅
はじ

験

日蓮またかくのごとし。始めはしるしなきようなれども、

いま
にじゅうしちねん

あいだ

ほけきようしゅご

ぼんしやく

にちがつ

してんとう

今、二十七年が間、法華經守護の梵釈・日月・四天等、

しゅご

ぶつぜん

おんちか

虚

むけんだいじよう

お

さのみ守護せずば、仏前の御誓いむなしくて無間大城に墮

恐

おも

いま

おのおの

励

つべしとおそろしく想うあいだ、今は各々はげむらん。

おおたのちかまさ

ながさきじろうひようえのじようときつな

だいしんぼう

らくばとう

大田親昌・長崎次郎兵衛尉時綱・大進房が落馬等は、

ほけきよう

ばち

顕

ばち

そうばち

べつばち

けんばち

みようばち

法華經の罰のあらわるるか。罰は総罰・別罰・顯罰・冥罰、

よつ

そうろう

にほんこく

だいえきびよう

だい
飢

渴

同
士打

たこく

四つ候。日本国の大疫病と大けかちとどしうちと他国よ

責

そう
罰

疫

病

みようばち

おおたとう

りせめらるるは総ばちなり。やくびようは冥罰なり。大田等

げんばち
は現罰なり、別べつばちなり。

おのおの ししおう ところ と い

各々、師子王の心を取り出だして、いかに人おどすとも

ししおう ひやくじゅう

おずることなかれ。師子王は百獣におじず。師子の子、ま

かれ やかん にちれん いちもん

たかくのごとし。彼らは野干のほうるなり。日蓮が一門は

ししほ

師子の吼ほうるなり。

こさいみようじどの にちれん 許

故最明寺殿の日蓮をゆるししと、この殿の許ししは、禍な

ひと 讒言 し ゆる

かりけるを人のざんげんと知って許ししなり。今はいかに

ひともう き 解 ひと もち たも

人申すとも、聞きほどこずしては人のざんげんは用い給う

だいきじん 付 ひと にちれん

べからず。たとい大鬼神のつける人なりとも、日蓮をば

ぼんしやく

にちがつ

してんとう

てんしょうだいじん

はちまん

しゅご

たも

梵釈・日月・四天等、天照太神・八幡の守護し給うゆえ

罰

難

ぞん

たも

に、ばつしがたかるべしと存じ給うべし。

つきづきひび

強

たま

弛

こころ

ま便

月々日々につより給え。すこしもたゆむ心あらば、魔たよ

得

われ

ぼんぷ

拙

きようろん

あ

とお

りをうべし。我ら凡夫のつたなさは、経論に有ることと遠き

恐

こころ

ことはおそるる心なし。

いちじよう

へい

じよう

怒

いちもん

一定として、平らも城らもいかりて、この一門を

散々

しゅつたい

まなこ

塞

かんねん

さんざんとなすことも出来せば、眼をひさいで観念せよ。

とうじ

ひとびと

筑

紫

指

行

ひと

当時の人々のつくしへかさされんずらん。またゆく人、ま

む

ひとびと

わ

み

引

当

とうじ

たかしこに向かえる人々を我が身にひきあてよ。当時まで

は、この一門にこのなげきなし。いちもん 歎 彼らはげんはかくのごと

し。ころ 殺さればまた地獄へゆくべし。じごく 我ら、現にはこの大難にわれ げん だいな

ああ 値うとも、後生は仏になりなん。ごしよう ほとけ 成 たとえば灸治のごとし。きゅうじ

とうじ痛 当時はいたけれども、後の薬なれば、いたくっていたからず。

か熱 彼のあつわらの愚癡の者ども、いいはげましておとすこと原 ぐち もの 言 励 墮

なかれ。かれ 彼らには、ただ一えんにおもい切れ。いち 円 思 き 善 よからんは

ふしぎ悪 不思議、わるからんは一定とおもえ。いちじよう 思 饑 ひだるしとおもわば、

がきどう寒 餓鬼道をおしえよ。はつ 寒 じごく さむしといわば、八かん地獄をおしえよ。

おそろししといわば、鷹 遭 雉 猫 たかにあえるきじ、ねこにあえる

鼠 たにん 思 ねずみ を他人とおもうことなかれ。

細々書 そうろう

年々 つきづき ひび

これはこまごまとかき候ことは、かくとしどし月々日々

もう そうら

名越あま少輔 ぼう 能登 ぼう さんみぼう

に申して候えども、なごえの尼・しよう房・のと房・三位房

そうろう

臆

病

もの 覚

欲

深

なんどのように候、おくびよう、物おぼえず、よくふかく、

疑

おおもの

塗

漆

みず

空

切

うたがい多き者どもは、ぬれるうるしに水をかけそらをきり

そうろう

たるように候ぞ。

さんみぼう

だいふしぎ

こと

そうら

三位房がことは大不思議の事ども候いしかども、

殿原

思

ちえ

もの

嫉

たも

とのばらのおもいには「智慧ある者をそねませ給うか」と

愚癡

ひと思

思

もの

もう

そうら

ぐちの人おもいなんとおもいて、物も申さで候いしが、

腹 黒

だいなん

当

そうろう

はらぐろとなりて大難にもあたりて候ぞ。なかなか、

散々

もう

助

辺

そうら

さんざんとだにも申せしかば、たすかるへんもや候いなん。

不思議

もう

もう

痴

あまりにふしぎさに申さざりしなり。また、かく申せば、おこ

びと

し 亡

おお

そうろう

もう

かがみ

人どもは「死もうのことを仰せ候」と申すべし。鏡のた

もう

かれ

ひとびと

ないない

怖

恐

めに申す。またこのことは、彼らの人々も内々はおじおそれ

そうろう

覚

そうろう

候らんとおぼえ候ぞ。

ひと

騷

兵

士

いちもん

人のさわげばとて、ひようじなんどこの一門にせられば、

書

付

給

そうら

きようきようきんげん

これへかきつけてたび候え。恐々謹言。

じゆうがつついたち

にちれん

かおう

十月一日

日蓮

花押

ひとびとおんちゆう

人々御中

三

郎

左

衛

門

どの

留

さぶろうざえもん殿のもとにとどめらるべし。